

国指定伊豆沼鳥獣保護区計画書
【存続期間の更新】

令和4年11月1日

環 境 省

1 国指定鳥獣保護区の概要

(1) 国指定鳥獣保護区の名称

伊豆沼鳥獣保護区

(2) 国指定鳥獣保護区の区域

宮城県登米市迫町所在県道新田若柳線と県道築館登米線との交点を起点とし、同所から同県道を南西及び西進し登米市道内沼境田線との交点に至り、同所から同市道を南西進し登米市道内沼線との交点に至り、同所から同市道を南西及び北西進し栗原市道内沼線との交点に至り、同所から同市道を北西及び西進し太田川左岸堤防東端との交点に至り、同所から同堤防を南西及び西進し栗原市道曾内熊狩線との交点に至り、同所から同市道を北進し県道築館登米線との交点に至り、同所から同県道を北西進し県道若柳築館線との交点に至り、同所から同県道を東進し県道新田若柳線との交点に至り、同所から同県道を南東進し起点に至る線に囲まれた区域。

(3) 国指定鳥獣保護区の存続期間

令和4(2022)年11月1日から令和24(2042)年10月31日まで(20年間)

2 国指定鳥獣保護区の保護に関する指針

(1) 国指定鳥獣保護区の指定区分

集団渡来地の保護区

(2) 国指定鳥獣保護区の指定目的

当該区域は、宮城県北部の栗原市及び登米市に位置する伊豆沼、内沼及び周辺の水田等である。伊豆沼・内沼は、北上川の支流である^{はさまがわ}迫川の沖積平野に位置する大小2つの淡水の沼で、1本の水路で繋がっている。伊豆沼・内沼は冬期凍結せず、周囲に採餌場となる田畑が広がっていることから、多くの水鳥の越冬地となっている。冬期には、マガンやヒシクイ(亜種ヒシクイ及び亜種オオヒシクイを含む。)などのガン類が10万羽近く渡来する。ハクチョウ類やカモ類の他、ハクガンやシジュウカラガンなどの希少ガン類にとっての主要な越冬地にもなっており、少数ながらオジロワシも越冬する。

特にマガンは、国内確認個体数の約9割が、当該地域を含む宮城県で越冬しており、当該区域はその内の約半数が確認され、国内最大級の越冬地の一つとなっている。

当該区域は、昭和41(1966)年に法第二十八条第一項に基づき県指定の鳥獣保護区に指定され、昭和57(1982)年に集団渡来地の保護区として同項に基づく国指定鳥獣保護区に指定された。また、昭和42(1967)年に文化財保護法(昭和二十五年法律第二百十四号)の規定に基づき国の天然記念物、昭和48(1973)年に宮城県自然環境保全地域にそれぞれ指定されている。国際的に、東アジアにおけるガンカモ類の渡り経路としても重要であり、昭和60(1985)年に「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約(ラムサール条約)」に登録されている。

以上のとおり、当該区域はマガンを始めとする渡り鳥の越冬地として重要であることから、集団渡来地の保護区として、鳥獣の保護及び管理並びに狩猟の適正化に関する法律(平成14年法律第88号)第28

条第1項に規定する鳥獣保護区に引き続き指定し、当該区域に生息する鳥獣の保護を図るものである。

(3) 管理方針

- 1) 集団渡来地の保護区として、ガンカモ類等の多様な鳥類相の越冬環境を保護するため、適切な管理に努める。
- 2) 鳥獣保護区管理員を毎年2名配置し、環境省職員と共に定期的な巡視を行い、鳥類の生息状況を把握し、違法捕獲の防止や制札の維持管理に努める。
- 3) 渡り鳥の飛来期間中（9月～翌5月上旬頃まで）、毎月3回を目処として定点カウント法及びルートセンサス法でのモニタリング調査を鳥獣保護区管理員及び環境省職員により実施し、渡り鳥の越冬期の生息状況の把握に努める。
- 4) 当該区域は、10万羽近いガン類の渡来地として、またハクガンなどの希少ガン類の渡来地として全国に知られており、多くの鳥類観察者が訪れることから、鳥類を驚かすような不用意な行動、ごみの散乱等による鳥類の生息環境への影響を防止するため、環境省職員及び鳥獣保護区管理員の巡視時に、鳥類保護に関する普及啓発、利用上のマナー向上、利用上の安全確保、鳥獣類への危害の未然防止、密猟の防止などについて、指導の徹底を図る。
- 5) 伊豆沼の畔に設置した国指定伊豆沼鳥獣保護区管理センターの維持管理を適切に行い、高病原性鳥インフルエンザのサーベイランス調査の主要拠点としての機能を維持する。
- 6) 鳥類の安定的な生息への著しい影響を防止するために、日頃から関係地方公共団体、地元NGO、地域住民等との連携に努める。

3 国指定鳥獣保護区の面積内訳

別表1のとおり。

4 指定区域における鳥獣の生息状況

(1) 当該区域の概要

ア 国指定鳥獣保護区の位置

当該区域は、宮城県北部の栗原市及び登米市に位置し、伊豆沼・内沼を中心とし、その周辺の大半は水田であり、数箇所に集落が散在している。

イ 地形、地質等

当該区域を含む地域一帯は一面の水田地帯となっており、南・西・北の三方が標高30～50mの丘陵で囲まれる開けた地形に位置している。伊豆沼は東西に伸びた面積332haの細長い沼であり、内沼は面積105haのほぼ楕円形の沼である。伊豆沼・内沼は、宮城県の北西部、迫川の支流の荒川の中流域にある淡水の沼であり、平均水深約0.77m、最大水深約1.6mである。近年、毎年約1万m³の底質が堆積し、水底の8割以上が泥に覆われており、浅底化、水質汚濁の要因となっている。

伊豆沼には荒川と照越川が流入し、内沼には八沢川と太田川が流入する。内沼の水は浄土川を通じ

て伊豆沼へ流入し、伊豆沼から荒川に流出する。当該区域の周辺は、かつては北上川と迫川が合流する氾濫原で、広大な湿地であったが、干拓によって多くが水田となった。伊豆沼・内沼は自然堤防により堰き止められて形成された天然湖沼で、一部が埋め立てられ、現在は遊水池として治水の役割も担っている。

ウ 植物相の概要

伊豆沼・内沼の湖岸はヤナギ林やマコモ群落・ヨシ群落で構成され、沼内にはハス群落が広く分布している他、希少種のアサザ群落やガガブタ群落、沈水性のクロモなどの水生植物が確認されている。水質汚濁の影響で、優占種が沈水植物から浮葉植物に変化し、特にヒシやハスといった水質汚濁に強い植物が優占している状況である。

エ 動物相の概要

当該区域は、冬鳥としてマガン、ヒシクイ(亜種オオヒシクイ及び亜種ヒシクイ)、ハクガン、シジウカラガン、オオハクチョウ、オナガガモなどのカモ類、オジロワシ、タゲリ、ベニマシコなどが飛来する。留鳥として、カルガモやオオバン、アオサギなどが生息し、夏鳥としてオオヨシキリやケリ、チュウダイサギ、チュウサギ、ヨシゴイなどが飛来し、44科173種が確認されている。

鳥類以外の動物相は、キツネ、タヌキなどの3科4種の哺乳類が確認されている。

また、鳥獣以外では、コイやフナなどの淡水魚類、イシガイ類などの淡水貝類、コフキトンボなど平野部の湖沼の代表種を中心とした昆虫類数百種など、多種多様な生物が確認されており、これまでに1,500種以上が伊豆沼・内沼で報告されている。平成8(1996)年以降急増したオオクチバス等の外来魚による食害で姿を消していたゼニタナゴやエビ類などが、近年の外来魚防除事業によるオオクチバス、ブルーギルの低密度化に伴って、再度確認されるようになってきている。また、この結果として在来魚類や、ヌカエビ等の小型甲殻類等を食べるミコアイサも、近年回復傾向が認められている。

(2) 生息する鳥獣類

ア 鳥類

別表2のとおり。

イ 獣類

別表3のとおり。

(3) 当該区域の農林水産物の被害状況

当該区域においては、農林水産物への被害としてカモ類によるレンコンの食害などが生じているが、軽微なため被害算定には至っていない。

5 施設整備に関する事項

- | | |
|---------------|-----|
| (1) 鳥獣保護区用制札 | 18本 |
| (2) 特別保護地区用制札 | 17本 |
| (3) 案内板 | 3基 |

(4)	給	水	器	—
(5)	給	餌	台	—
(6)	巢		箱	—
(7)	その他(管理センター)			1棟
	(資材庫)			1棟

6 存続期間の延長の理由

当該区域は、マガンを始めとするガンカモ類の主要な渡来地として重要であり、これらの鳥類の越冬地の保護及び当該区域に生息する鳥獣の保護を図るため、引き続き鳥獣保護区に指定する必要がある。

7 参考事項

(1) 当初指定

昭和 57(1982)年 11 月 1 日(昭和 57 年 10 月 30 日 環境庁告示第 108 号)

(2) 経緯

平成 14(2002)年 11 月 1 日(平成 14 年 10 月 3 日 環境省告示第 74 号)

存続期間の更新